



Title	近世後期における八王子在方綿買の経営
Author(s)	松石, 泰彦
Citation	一橋論叢, 111(2): 276-292
Issue Date	1994-02-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/10842
Right	

近世後期における八王子在方縞買の経営

——中神村・中野久次郎家を中心に——

松 石 泰 彦

はじめに

近世後期において八王子(現東京都八王子市)近辺は「山物類」と呼ばれる縞織物の一大生産地であったことは周知の通りである。この八王子織物産業あるいはそれをとりまく流通問題については『八王子織物史』⁽¹⁾に詳しい。またその後『八王子市史』⁽²⁾においては、近辺豪農による賃織・賃機についての詳細な分析もなされており、この八王子織物をめぐる周辺地域は近世後期々幕末の発展段階と分業圏の形成の問題、流通構造の問題という観点から一九六〇年代に注目を浴びた地域であった。しかしその後、近世八王子織物産

業あるいはその流通についての新たな研究の蓄積は残念ながらほとんどないといってよいだろう。

八王子縞織物の生産・流通をめぐって近世後期に重要な役割を果たしたのは「縞買」と呼ばれる織物仲買人たちであった。彼ら縞買は大きく分ければ町方(宿方)縞買・在方縞買に分かれ、この地域においての流通に大きな役割を果たしたが、『八王子織物史』自ら指摘するように、在方縞買の存在形態については史料的な制約もあって不明の部分が多い。在方縞買について特に経営的な部門にまで踏み込んだ研究はまだ不足しているのが現状である。

一般的に極めて流動的で縞買を継続的に営まない在

方縞買の中にあつて、天明年間から縞買活動を始め、明治前期まで一貫して八王子織物を手広く扱つた有力な在方縞買商人がいた。中神村の中野久次郎家である。ここでは、多様な在方縞買の一つの例として同家の経営を詳細に分析することで、従来不明であつた在方縞買の経営の実態を明らかにし、在方縞買の存在形態に迫りたい。

一 中神村 中野久次郎家の概要

中神村（現昭島市中神）は多摩川をはさんで八王子北西部と接する場所にある。周辺は畑がちな生産力の低い地域で、明治七年の「産物書上」（中野家文書・以下書名はことわりなき場合はすべて中野家文書）によれば米百五十五石一斗、大麦百八十一石余、小麦百十二石、その他では繭六〇石（糸三〇貫目）という村であつた。支配は近世後期を通じて旗本坪内・曾雌の二給領であり、中野家は中組Ⅱ坪内領の有力農民であつた。

また、中野家は八王子在方縞買の筆頭的存在で、化

政期に始まる八王子宿方縞買との抗争過程において在方縞買として主導的役割を果たすとともに、天保と幕末期には都市問屋側との江戸直売・打越荷物をめぐつての抗争において縞買側の代表として活躍した。

土地所有面でいえば、明治五年時点で中神村全体で四百二十八石余・一〇四軒であり、そのうち中野家が一五〇石あまりを占有し、一石未満の農民が全体の五四パーセントを占めるという極端な分解を示していた。中野家の土地所有は享保期から田畑あわせて一〇〇反以上あり、特に天保六年以降嘉永期までに急激に土地集積が進んだ。残念ながら紙数の都合上それらについてはここでは細かくは触れることができない。

中野家の縞買経営についてはこれまで『昭島市史』⁽⁴⁾における分析と、白川宗昭氏の研究がある。前者は、同家史料の天保期の「店卸附立帳」を中心に、その時期前後の経営動向をさぐつたものであり、後者は同家に残された文政・天保期の日記三点を基にして日常的な商業活動の様子を明らかにするものである。しかし、前者においては天保期のみ分析では同家の経営傾向

をとらえきれておらず、また後者は日常的商業活動について興味深いものがあるが、総体としての同家の経営形態・存在形態を探る趣旨のものではないのであって、必ずしも中野家の経営が明らかにされたとはいえなかった。

幸いにも一九七九年、中野家で天保期以外の経営史料を含めて多くの新史料が発見された。それらを用いて、在方購買の筆頭的存在であった中野久次郎家の経営を以下で詳しく分析してみよう。

二 中野家の商業経営の変遷と特徴

(1) 商業資産の変遷と画期

中野家に現存する経営関係史料のなかで、長い期間を統一的に把握できるものとして文政二年～安政四年の「店卸附立帳」がある。これらを用いて同家の文政年間から幕末開港期までの経営実態を通観してみよう。この「店卸附立帳」は同家の土地を除いた有価資産額を、毎年正月ごとに書きあげて、その時点での商業資産の総額を計算したもので、具体的には保有現金・各

種在庫品・売掛金・債権などを合計したものである。⁽⁷⁾

同家の商業活動として中心をなしているのは、織物仲買業と貸金業であったが、そのほかに米の販売と木材の販売を行っていたようである。木材については在庫量から判断すればそのほかの商業量と比して微量であり、おおよそ以下の五項目が同家の商業資産の構成要素である。

同家のこうした商業項目についてまとめたものが図表1である。ここで各項目については若干の説明が必要であろう。

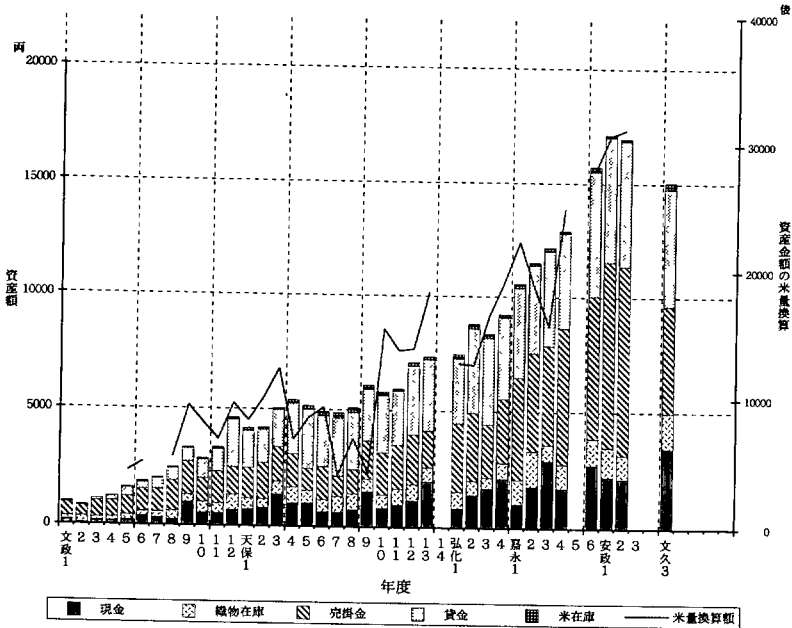
①現金 正月時点で中野家が保有している現金の量を示す。

②織物在庫 正月現在に同家に存在している各種織物類(絹・木綿とも)の価格の合計金額である。なお、糸はここには含まれていないが、相対的金額としては少ない(後述)。

③売掛金 中野家の固定的織物販売先相手の売掛金である。生糸については在庫の額などから見るとほとんど扱っていないとみてよい。その他商品の取引に関する

(79) 近世後期における八王子在方綿買の経営

図表1 中野家商業資産の動向



注：中野家の商業資産額は基本的には金額（両）で表されるが、相対的な金貨価値の低下・インフレなど、単純に金額の増加が実質的な資産増加とはいえない面もある。そこで、同家の「店卸附立帳」の米在庫の価格をもとに、商業資産額を米量に置き換えてみたのが図表中の線グラフである。在庫の米の価格は販売価格として一応各年度の米相場をもって附立てられているようなので、精密とはいえないにしても、おおよその目安にはなるだろう。やや変動が激しいものの、傾向は金額の傾向と同様とみてよいだろう。

売掛金や、市での取引に際する売掛金などは入っていない。
ない。

④貸金 主として近在のあるいは八王子宿の商人・仲買・農民などに対する貸付金と思われる。ただし、中には旗本・坪内家に対する金融分⁽⁸⁾なども含まれている。
⑤米在庫 正月の時点で中野家が保有している米を金額換算したものである。文政の初期を除いては毎年かなりの量になるので、もちろん自家消費分ではなく販売用の小作米と思われる。

これを用いて、中野家の経営の変遷を追ってみよう。図表からわかるように同家の経営はおおむね文政以降順調に成長を続けたといつてよい。文政初期には一千兩弱であった資産額が、天保三年には五千兩を超え、嘉永初年には一万兩強となっている。更に安政年間には一万七千兩強でピークを迎えているが、文政初年からは比べれば四〇年たらずの間に商業資産額で実に十七倍以上の成長を遂げたわけである。天保期の中頃にはやや停滞が見られるが、おそらくこれは不作・飢饉の影響で、それでも大した落ち込みを見せないままに天

保期の後半からまた発展を続けている。特に、天保期まではその増加傾向が比較的緩やかであるのに対し、弘化期以降の幕末開港前段階に急激な伸びがあるのが特徴である。

以上のようにグラフの傾向を概観すると、同家の資産増加傾向には三つの画期があると思われる。

一つは文政年間の後半であり、この時期から織物関係の商業資産の成長と共に貸金関係の資産が登場し成長を始める。文政期後半は中野家の商営業が大きく成長する起点であったといつてよい。織物関係(売掛金・織物在庫)も文政初年から比べれば三倍程度に増えており、貸金も伸長が著しい。中野家が中神村の名主に就任するのはこの時期である。

そして二つ目は天保期半ば、織物部門の資産額は停滞・縮小気味であり、この時期それに代わる形で貸金業が大きなウェイトを占めるに至る。天保の不作・飢饉の影響は織物仲買業の不振と同時に、困窮する近在農民への貸金業を同家経営の軸の一つに据えることになったのである。

三つ目の画期は天保期半ばの停滞を経た後の、弘化・嘉永の急激な成長期である。天保期停滞していた織物仲買業関係の資産は、その後、特に嘉永期以降に急成長を遂げ、再び貸金業を抜いて同家の商業資産の中核となり、安政期にかけての急激な商業資産拡大に中心的役割を担った。つまり天保期の貸金業の台頭はかならずしも全面的な高利貸化へのシフトを意味するのではなく、事実として幕末まで織物仲買業は著しく成長し続けたのである。⁽⁹⁾

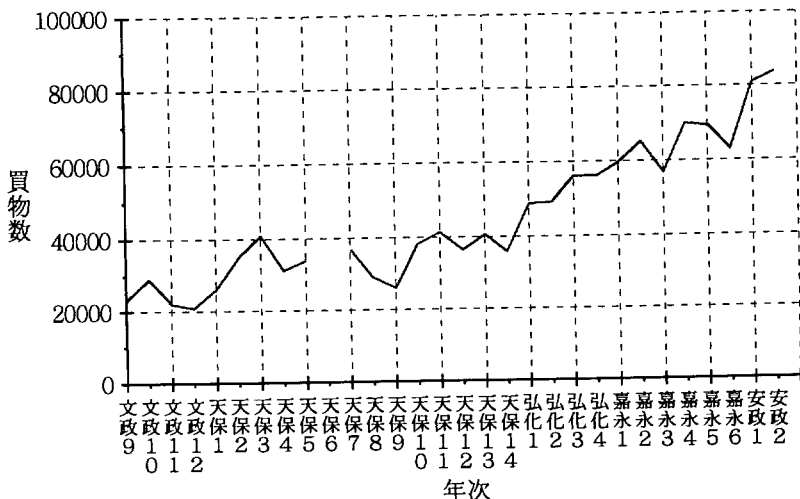
そしてそれらは安政前半にピークを迎えるが、開港以後文久年間には一応の減少傾向を見せており、これが四つ目の画期ともいえなくもないが、この減少の最大の要因は織物関係の売掛金が激減したことにある。これは当然開港の影響が考えられ、すなわち開港による横浜への生糸流出が起こり、八王子織物業が全体として衰退することになったのであり、それにより同家が扱ひうる織物取引量が全体として減少したということであろう。ただし、後に触れるように、単純に開港による生糸流出が八王子周辺部の織物業を一気に衰退

させ、それにより同家の扱ひ高が激減して、同家の没落をもたらしたとするのはいささか性急であるように思える。

(2) 織物仲買業経営の傾向

以上のように中野家の商業資産の動向について見てきたが、ここで特に織物仲買業部門については考察を要する。図表1において見てきた織物仲買商業部門の数字は、基本的には各種固定客に対する売掛金と在庫品との合計である。しかし在庫品はともかくも、織物売掛金は同家の織物仲買業の絶対的規模や量を直接的に示すものではない。つまり、売掛金の増加をもって織物仲買業の成長ととらえられるのかという問題がある。売掛金が累積的に増加していったとすれば、織物仲買経営の実態はむしろ圧迫されて、いずれ破綻に向かうだろう。残念ながら中野家には、資産動向としての「店卸附立帳」の類の他に、動態としての取引額を解明できるような史料（たとえば「売網帳」など）はまだ見つからない。

図表2 織物買入量の推移



しかし、結論から先に言えば、同家の売掛金の増加傾向は、実態としての織物取引高の増加を背景としたものであり、前項で検討してきたような織物仲買部門の資産額の増加は、織物仲買業の急成長をそのまま反映しているものであった。

文政年間から安政年間にかけての織物取引高の実数を示す史料として、中野家が文政九年から始めた織物取引に際しての積立金⁽¹⁰⁾というものが参考になる。中野家は織物買入の際、織物一品につき二文⁽¹¹⁾(文政九年だけは一文)と決めて積立を行っており、その記録が各年度ごとの「店卸附立帳」の末尾に記されている⁽¹²⁾。それを抽出して図表化したものが図表2である。

すなわち、このグラフでは同家の織物買入量が、天保期には不安定的ではあるが、全体として増加傾向にあること、そして特に弘化期以降に急激な増加をしていることが見てとれ、これはまさに先に掲げた図表1と傾向として一致するものである。従って、弘化以降の織物資産部門の成長は売掛金の累積による不安定的額面増大ではなく、織物取引量の増大による織物仲買

図表 3

慶応2店卸口銭改帳にみる
実勢取引高
(慶応1年8月～慶応2年正月)
(単位; 両)

稲西屋正兵衛	24790
小泉新助	19283
近江屋八郎助	9336
銭屋清兵衛	8975
泉屋清兵衛	5264
糸屋長左衛門	3718
小橋屋利助	2873
古川嘉兵衛	2628
源田藤兵衛	1786
市田矢助	1606
高田善右衛門	1548
近江屋五兵衛	1507
吉野屋兵藏	1433
大橋茂兵衛	1245
大橋嘉兵衛	1032
総屋卯兵衛	955
塚本弥惣兵衛	854
塚本和助	844
塚本助右衛門	825
小出庄兵衛	823
寺井嘉兵衛	817
吉丸屋三郎兵衛	616
岡田小八郎	591
小泉幸助	566
嶋屋与兵衛	497
布屋治郎兵衛	472
笹屋善七	394
市田孫市	260
近江屋新左衛門	209
近江屋佐兵衛	172
計	95942

(分以下切捨)

(3) 織物取引業と貸金業の比重
次に、同家の経営を決定的に特徴づける要因となる、貸金部門と織物商業部門の相対的比重の問題について考察してみよう。確かに図表1でみる限りは天保年間には二つの部門はかなり拮抗してきており、一見高利貸業の比重が高くみえる。⁽¹³⁾しかし、実は織物仲買関係の売掛金は実際の取引高のほんの一部の具現化であって、潜在的にはこの何倍もの取引高が存在した。

織物仲買業の実際の取引高が年額いかほどであったのかは直接それを明らかにする史料はほとんどみつからないが、ここに注目すべき図表3を掲げる。
これは慶応元年八月～同二年一月までの「店卸口銭改帳」を整理したものであるが、これによれば幕末開港後において同家は約九万六〇〇〇両の織物取引をおこなったことがわかる。しかもこれらの相手は中野家の取引相手の全てではないし、期間的にも春絹なども含んでいない時期で、したがって慶応元年一年で取引量は更にこれ以上あったということになり、おそらく

商人としての実質的成長とみてよい。

一〇万両は下らなかつたであろう。なお、口銭率は一パーセントであり、この九万六〇〇〇両弱の織物取引で得た口銭は一〇〇〇両近いものであった。

この動態としての取引額は、当該年度のものこそないが、図表1でみたような資産額での織物取引関係資産よりけた違いに大きい。この慶応二年にのみ同家の織物取引が異常に拡大したとは考えにくく、それ以前にも図表1に見られる織物仲買関係売掛金を大幅に上回るかなりの取引量が実態としてあったことが推測される。

このように、同家の織物取引業は実態としては「店卸附立帳」に見られる売掛金や織物在庫の額面よりはるかに巨大な経営を行っていたことが注意されるべきであり、その点からみれば中野家の経営部門の基幹は、あくまで貸金業ではなく、一貫してそして圧倒的に織物仲買業であることに注意しなければならない。もちろん貸金業に関しても、返済されたものを含めて動態的に捉えるなら、図表1の値より大きいものにはなるうが、実際のところ帳簿上かなりの相手と金額が毎年

固定化しているので、動態としてもそれほどこの図表の額面より大きかつたとは思えない。

三 幕末開港期中野家の経営

(1) 開港後の織物仲買業

開港後の時期においては、中野家の「店卸附立帳」は、主として関西(大坂・江州)商人との取引を記した「遠国方・元方」店卸帳と、主として江戸商人相手の「東方」店卸帳の二つに分割された。残念ながら同じ年のものが一セット二冊とも史料が揃う年は文久三年度のものだけであり、それは図表1に一括して盛り込んである。図表1の文久三年のデータについては、弘化年間から安政年間にかけて順調かつ急激な伸びを記録した後、開港を経て確かに減少こそしているが、それほど急に衰退の途をたどつたというわけではない。

また、慶応元年および二年については「東方」のみ「店卸附立帳」が存在する。そこに見られる「東方」の商業資産(手元にある現金、糸・織物関係売掛金と

図表 4

慶応期「東方」商業資産表 単位=両 (分以下切捨)

	改金	売掛金	織物在庫	合計
慶応 1	515	4399	899	5813
慶応 2	7	10195	1073	11275

織物在庫品、織物関係貸借)は図表4のようになり、この額だけ(「遠国方・元方」を含んでいない)でも、嘉永期ほどの高い水準の額面に達している。⁽¹⁵⁾これに「遠国方」での江州商人との取引に際して得た口銭をくわえれば(これらの年の分の史料は見あたらぬ)さらにそれ以上の資産規模であろうと思われる。

そしてこの文久年間の「東方」「遠国方・元方」、慶応年間の「東方」二年分の額面はおそらく糸ではなく織物取引に関する資産額だけに、開港後の八王子縞買がこれだけの額面の織物在庫を持ち、多額の取引額を背景としたこれだけの売掛金を計上していることは注目すべき事実であろう。さらに、先に掲げた図表3では慶応元年下半期における実勢取引高が九万六〇〇〇両という数値にのぼっている事実も見落とすことはできない。

その売り先はあくまで江戸・関西市場での国内需要と結びついていたのである。⁽¹⁶⁾

開港による横浜を通じての生糸流出は国内生糸価格の高騰をもたらし、絹織物産業に深刻な打撃を与え、同時に縞買商人たちの没落をもたらしたといわれるが、⁽¹⁷⁾開港以後の段階に至っても中野家はかなりの量の絹織物を強力に集荷・販売しえたことは特徴的である。中野家がこの時期になぜそうしたことが可能であったのかという点については明確な答えはまだない。⁽¹⁸⁾

(2) 中野家と生糸輸出

中野家は近世後期に代表的な縞買商人として大規模な経営を行ってきたわけであるが、生糸についてはほとんど扱ってきいていない。図表5には同家の生糸在庫量を年次別に記したが、これを見ても弘化以前にはほとんど生糸を扱っていないことがわかる。一つには中神村近辺は八王子南部地域のような生糸生産地帯ではないこと、また北部の織屋地域とも違う地域であり、中野家のような縞買は単に八王子や青梅の市を中心に

図表5 中野家生糸在庫表

文政1		天保12	6
文政2		天保13	5
文政3		天保14	
文政4		弘化1	65
文政5		弘化2	167
文政6		弘化3	191
文政7	19	弘化4	22
文政8	19	嘉永1	150
文政9		嘉永2	30
文政10	7	嘉永3	
文政11		嘉永4	142
文政12		嘉永5	
天保1		嘉永6	
天保2		安政1	293
天保3		安政2	71
天保4		安政3	
天保5		安政4	
天保6			
天保7			
天保8			
天保9	7		
天保10			
天保11	6		

単位：両
(分以下切捨)

を組織するような形態には至らなかった。

安政五年の開港を期に、武州養蚕地域でも生糸の横浜への積み出しが盛んになり、横浜への生糸積み出しの仲買として、また自ら賃挽を組織して自家製糸以外に販売用生糸生産にあたり

して、あるいは時に不特定な周辺農民から織物を買集めるといふ形にならざるをえなかったことが影響している。すなわち賃織を組織するわけではなく⁽¹⁹⁾完成品としての織物を買集める形である場合、自ら生糸を集める必要はなかったのである。

また弘化以降には時には多額の生糸在庫が見られるようになるが、これらも非常に流動的であり、変動が激しく、むしろ生糸の値上がり傾向に目を付けて投機的に取引をしていた結果ではないかと思われる。したがって開港前の段階では中野家は弘化期頃から生糸に関心を持ち始め、投機的な商売を行い始めたが、賃織

巨額の富を得る農民もあらわれた。八王子織物周辺地域では、南部鑑水村の大塚五郎吉家などがよく知られた例である。⁽²⁰⁾

こうした開港後でも先述したように中野家は大量の織物仲買を維持していた。しかし中野家は横浜への生糸移出にまったく興味を示さなかった訳ではない。確かに織物商売に比べると、中野家の生糸商売は、自ら生糸を集荷して横浜へ送るといふ形態には必ずしも積極的ではなかったようである。たとえば元治元年には一三六両余りが「横浜送り」として帳簿に登場するが、それ以外には同様の記載は一切ない。同年の「買入・

【史料】

中野手引分

仕切書

一八王子提糸

百三拾斤〇五分

式箇

内

四斤 袋四ツ分

八斤式分式夕 九袋

但し百斤二付六斤五十ツ、

残而正ミ

百拾八斤 式分式夕切捨

百斤二付五百拾五枚

代洋銀 六百〇七枚五分

他二分切捨

内

九枚壹分 割運上銀

壹夕式毛 口銭銀共

三枚九分二夕

荷作り掛り

質、南京進上

葦番見世番進上共

金川駄賣

此銀壹匁五分七夕 商館持込賣共

拾三枚壹分三夕式毛

拾六枚五分

別品代銀引

残而 五百七拾七枚八分六夕八毛

右之通番英商ケセキ方直

売渡し代金請取番面之通り

差引相渡し、此表出入無之候

以上

文久三年

八月廿九日

武州中相原村

網野林蔵棟

横浜本町五丁目

越州屋金右衛門

【中野家文書】

諸入用書抜 東方」という史料には「糸方 千三十二両一分一朱」とあり、多額の生糸が買い入れられ、また織物部門と別に糸を独立して扱った形跡があるが、その後それが横浜にどのように持ち出されたかは定かではない。

中野家の横濱生糸貿易への関わりを示す注目すべきものとして上に掲げた〔史料〕がある。

この史料では相原村（現町田市相原）の網野林蔵なる人物が八王子提糸を横濱に持ち込み、そこで売込問屋の越州屋が仲介してイギリス商人ケセキに販売したという事実が記されている。

注目されるのは網野林蔵↓越州屋↓英商ケセキという生糸売込に関する仕切書がなぜ中野家に存在しているのかという点である。そこで問題となるのは冒頭の「中野手引分」という形態である。すなわち網野林蔵と越州屋の間での取引に中野家が「手引」という形で介在しているのである。現存する同様の仕切書を整理したものを図表6に掲げた。これが文久三年度の全ての取引とは言えないが、ミニマムでも「中野手引」に

図表6
網野林蔵による「中野手引分」横浜売込糸

年月日	糸種類	量(斤)	価格(枚)	売込相手
文久3.4.4	八王子嶋田糸	811.89	3166.5	英商ロレル*
文久3.6.27	八王子提糸	469.00	2255.0	英商ケンフナラ
文久3.6.27	八王子提糸	322.10	1423.0	英商ホーエル
文久3.8.11	八王子提糸	531.50	2710.0	?
文久3.8.29	八王子提糸	118.00	607.5	英商ケセキ
文久3.10.27	八王子提糸	542.70	2849.0	仏商グチャウ
文久3.12.16	八王子提糸	89.50	422.5	53番
計		2884.69	13433.5	

価格は洋銀(枚)

*注：売り手が岡屋善助・石川屋藤太郎と網野林蔵。他は全て網野林蔵のみが、売込商越州屋を介して外商に販売

よる網野林蔵の糸売込は洋銀一万三千四三三枚に達しているのである。また同様に網野林蔵による生糸売込が元治元年にも行われた形跡がある⁽²¹⁾。

このような「中野手引」形態による生糸商売が、中神村と相原村という八王子を中心として南北にやや離れた村の二軒の商人の間で成立したのには訳がある。網野林蔵は天保十三年から綿買奉公人として中野家に勤めていたのである⁽²²⁾。安政元年には奉公人筆頭の地位となり、安政三年には奉公人としての年季を終えた。その直後、開港による生糸ブームが起こった。場所柄も相原村は大塚五郎吉で有名な鐘水村のすぐ南隣であり、この地帯一帯は化政期以来製糸地帯として発展してきた土地である。織物仲買の中野家のもとで働いてきた林蔵にとっては、横浜への生糸持ち込みは非常に魅力的な事業であり、また織物商売を通してきた中野家にとっても横浜生糸への進出は興味ある事業であったろう。そこで林蔵が生糸商売をするにあたって資金援助をしたのが中野家であったというところは想像に難くない。それが「中野家手引」という形で仕切書が中

野家に残っている理由であろう。ただし、文久三年の一連の取引に際して、中野家の「店卸附立帳」には直接に林蔵宛の貸金は存在していない。既に決済されていたのか、あるいは何か別の形で貸与されたのかは不明である。また網野林蔵そのものについても現在のところ不明である。

元治元年にも網野林蔵と共に糸売込を行っていたことを前述したが、元治元年度の「店卸附立帳」には林蔵宛に丁度一〇〇〇両の貸金が存在する。やはり網野林蔵の投機的生糸売込にあたっては中野家が資本金を貸与していると思われるのであって、八王子南部地帯における買糸による投機的糸商人の活動は、中野家のような古来からの大規模縞買商人II大豪農による資金貸与を前提としていたのである。

横浜への生糸流出によって多くの織屋や縞買は没落の途をたどることになるが、直接的に生糸生産に関わらず自ら賃織も組織しなかった在方縞買であり、図抜けて大きな豪農である中野家は、南部生糸生産地帯の新興・投機的生糸商人への資金貸与という形をとって、

浜出し生糸に参入したのである。そして、こうした資金貸与による生糸商売への間接的参加は、中野家にとってももっとも安全なそして保守的な生糸ブームへの参加方法であった。すなわち糸相場の変動によって損失が生じれば、生糸買付のための出資金は網野林蔵への貸金へと性格を変化させればよいのである。相場変動によるリスクを網野林蔵のような者たちについても転嫁することが可能な形態であったのであり、またそこが中野家の豪農としての性格を端的にあらわしているということもできよう。

結びにかえて

以上のように、八王子在方縞買の代表格である中野村・中野久次郎家について、主としてその織物仲買・生糸商売に絞って経営の分析を行ってきた。基本的に在方縞買の経営分析そのものが少ないことから、従来不明であった在方縞買の存在形態について一事例を提示することができていれば幸いである。この中野久次郎家には様々の経営上の特色を見いだすことができ、

それらは在方縞買としてのみならず、市場圏形成がなされつつあった織物生産地帯に隣接した豪農としてのの姿としても興味深いものがある。ここでは紙数の制限上、特に縞買部門の経営に絞らざるを得ず、開港後の幕末期においても中野家は縞買経営を基幹とし強力に国内市場と結びついて集荷力を発揮したという事実、そして生糸輸出に關しての縞買豪農から生糸生産地帯商人への金融關係のあり方などを明らかにしたにとどまった。論及することのできなかつたことも多く、いづれ場を改めて論じたい。

- (1) 正田健一郎 一九六五年
- (2) 一九六七年
- (3) 鎌水村大塚家・小比企村磯沼家・上恩方村草木家・下恩方村松井家などの分析がなされている。
- (4) 一九七八年
- (5) 「豪商中野久次郎の縞仲買活動」―諸用日記控にみる―『多摩のあゆみ』三二 一九八三年
- (6) 前述『昭島市史』の時点では天保年間のものしか発見されておらず、ゆえに本稿では『市史』の推定と

は異なる多くの事実が出てくることとなった。

- (7) したがって、実際の動態的な商業取引の行われたのは一つ前の年の正月からの一年間ということになる。
- (8) 旗本・坪内家に対する金融は幕末期に特に増加、中野家の財政事情をかなり圧迫したようである。
- (9) 以上のような貸金業と織物仲買業の傾向について『昭島市史』は、天保六年は貸金業が絹織物取引業の額面を凌駕する点を重視して、これを同家が織物商営業から高利貸・寄生地主に転化していく画期ととらえている。しかし、同書で分析しているのは天保期のみで、経営実態のみで、この時期確かに貸金業が同家の重要な部門となっていくことは事実であるが、図表1での天保期以後の傾向を見ても決して織物商売部門が縮小し、貸金部門にとって代わられていったというものではない。また、後述するように、ここでの資産額の主体をなす売掛金を用いて、貸金業との相対的比重を問題にするのは性急である。中野家の織物商売の経営規模は売掛金の背後にある実際の取引高を考慮する必要があろう。
- (10) 『昭島市史』ではこれを「買物数金」と呼んでいるが、史料を見ると実際には「買物数」と「金」を分けて記しているのであって、この積立金の名称ではない。
- (11) この積立金は、天保七年には累計一〇〇両を超え

るにいたり、ここで中野家は一〇〇両を村の石橋の修理費として寄付した。

(12) 天保九年までは概数で百単位まで、それ以後は一品単位まで細かく買入数を記してある。織物は各種絹・木綿織物を全て含んでいると思われるが、それらの比率はわからない。

(13) 前注(9)参照。つまり天保期以降の展開からみても同家は幕末期に高利貸を経営の主体としたのではないし、また売掛金ではなく実態としての織物取引額に考慮してみれば、同家の高利貸の経営比重はさらに小さなものになる。

(14) 開港後のこの時期は生糸の国外流出により八王子織物業は全体として衰退きみであったとされる。こうした全体傾向の中でこの時期のみ突出して取り扱ひ量が増えたとは考えにくい。

(15) なお図表4において改金(現金)が七両と異常に少なく売掛金が非常に多いのは、おそらく各商人からの支払いが遅れているせいであろう。

(16) 紙数の都合上言及する余地がなかったが、中野家は早くから江州商人と多額の取引を行っており、江戸市場以外に江州・大坂に販路を拡大していた。明治期の得意先のメモにも圧倒的に江州商人の名が多い。

(17) たとえば『八王子市史』の下恩方松井家など。ま

たこの時期、従来有力な縞買であった八王子小門宿の福岡直吉、八王子八木宿の源蔵が経営危機に陥り、中野家に縞買関係の道具と得意先を売り渡している。

(18) 試験的段階ではあるが、筆者は幕末期の織物取引においては木綿織物の比重が高かったのではないかと考える。ただし、売掛金や取引高では木綿と絹との量的比率はまったくわからないので、史料の発見が望まれるところである。

(19) 中野家が賃織あるいは賃挽を組織したという史料は見当たらない。

(20) 佐々木潤之介『幕末社会論』塙書房 一九八一年

『八王子市史』第四章第四節など

(21) 同家文書に元治元年度に網野と中野が「乗合」形態で生糸を浜出ししている仕切書がある。

(22) 網野林蔵が中野家奉公人林蔵であったことは、直接的にその素性を明らかにする史料がないため若干の実証を要する。中野家の「店卸附立帳」の末尾部分には必要経費の項目があり、そこに奉公人の給金も記されるが、林蔵の初出は天保十四年のもので給金一年一両であった。その後安政元年に売掛金に混じって「林蔵 豊蔵川越 三百五十両」が記載され、これはおそらく林蔵が関わった川越木綿買物が売掛金となっているの

だろう。林蔵はこの年奉公人筆頭、豊蔵も中野家奉公人であった。この項は翌安政二年「林蔵川越分 四十両」となり三百九両は回収されたようだが、残りは林蔵への貸しになっている。さらに翌安政三年には同じ項が「網野林蔵 四十一両」の貸しとなり、同時にこの年林蔵は奉公人リストから外れた。一連の項目の内容は不明な点が多いが、いづれにしても奉公人・林蔵が網野林蔵であることは間違いのない事実だと思われる。

(一橋大学大学院博士課程)